

人生を拓いてくれた「珠玉の言葉となみ投稿文」1971年

1971年を有意義に なみ 第27号 1971年1月10日発行

なんでも、昨年の交通事故死傷者は100人に1人の割合だそうだ。そう言う事は、32秒毎に1人がケガをして、31分35秒毎に1人が死んだことになるそうであります。この数字を見ても何とも感じない人は、新鮮さの無い社会生活にマヒした人。ゾーとし

た人は身近に被害者がいる人、アーアー何とかせにゃーこれから先どうなるだーと感じた人は一番ケンメイな人(私)。以上は冗談としても、我々の身近に事故があると「アー又か、なーんだ」と言う気持ちになるのは人間の順応性の為せるワザか。

昔、私が中学三年の修学旅行で東京へ行った時、バスの中で騒いでいる我々の耳に「ウ~~~~ウ~~~~」と言うサイレンのヒビキ・・・私たち田舎者には、その響きが珍しいので、バスの窓からみんな顔を出した。それを見てバスガイドが「東京ではサイレンの音は毎日鳴りますので、そう珍しいことではありませんからご安心下さいー」との事。その頃はあーそうかと思っていたけど、今じゃー豊川でもサイレンの音は何も珍しくなくなって、昼のサイレンの様な感じになっちゃった。

おそろしいことだなー。事故が起きて・・・普通みたいな日常生活・・・こんなに我々の心までマヒしちゃっていいのかなー。

人間の精神(心)よりも、物質(科学的)が進み過ぎちゃった結果だろうーな。物ばかり出来て、それを使うべき人が使い方を知らない様な現実。車は便利だけど、スピード・スリルに酔ったら、これ程危険な物は無い。この結果が、交通事故死傷者昨年100人に1人・・・という事実になって出て来る。それとは別に・・・公害・・・これは、現実の害となって来るのが良くわからない。それ故もっと危険だけれど、四日市、水俣、田子の浦等の様に、実際の生活に害が直接ふりかかってやっとなる。ということは、日一日とむしばまれて行く自分の体が、ゆっくりと現れるので良くわからない・・・困ったことだ。

今年は皆さんも物質文明に溺れない様に、自分自身の「心」充実した年にしてほしい。

ある自殺 なみ 第28号 1971年2月6日発行

時・・・昭和元禄46年1月31日、日曜日・・・中日新聞15面・・・

公害、自然破壊に抗議・・・予備校生が鉄道自殺・・・その遺書には

葬式はしなくてもよい。死ぬ事は四年程前から時々考えていた。受験は問題ない。

全く個人的な事であって誰のせいでもない。誰もせめられる者はいない。人生は

不可解なものだ。人間は自然を破壊することによって、自らを破壊させようとしている。人類滅亡の日は遠くない。戦争したり、戦争する準備にやっきになるより、公害や自然対策に力を入れるべきだ。

と書いてあったという。彼は彼なりに、この現代社会を分析し、考え、そして死を選んだ。

彼の死を・・・「なーんだ自殺じゃーないか」と考える者がいたなら、それは人間じゃーない。ただの動物だ。人間のような格好をした動物だ。それはその人自身、何も、この社会に対して、自分の意思を持たず、人間として的大脑を持ち合わせていないからである。

彼は、そういう人間に抗議して自殺という道を選んだのだ。私利私欲に走り、瞬間のみに生きる。そんな人間に抗議して。私は、彼の死を悲しむ、三島由紀夫の死より、はるかに考えさせられる死であったから・・・・・・・・。オワリ

上記の文につづいて、「詩集たいまつ」よりの言葉が書いてある。

- ・ 人の一生は「なぜ」ではじまって、「なぜ」でおわる
- ・ 木は年輪の波をひろげて伸びるように、人は一つの「なぜ」の中から新しい「なぜ」をひろげて伸びていく。それゆえに人生の努力目標は三つである。一に疑うこと、二に疑うこと、三に疑うことである。
- ・ おのれを疑う民族はほろびない。おのれを疑わない民族はほろびる
- ・ 決断は、準備の充実から噴き出すものである